

Title	秘めたる愛のパラドックス
Author(s)	六反田, 収
Citation	英文学評論 (1992), 64: 1-21
Issue Date	1992-09
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_64_1
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

秘めたる愛のパラドックス

六反田 收

1

中世の宮廷愛 (courtly love) がそうであるように、秘密性を最大の特徴とする男女の関係では、それもとりわけ最初の段階にあつては、コンフィダン (ないしはコンフィダント)、つまりは両者を結ぶ仲介者、腹心の友の存在が不可欠であり、またその働きを補填する手段としての、文字による当事者間の意志の疎通の試みも必須であつた。チョーサー (Geoffrey Chaucer) の『トロイルスとクリセイデ』 (Troilus and Criseyde) に描かれている恋愛も同様な条件下に置かれている。

登場人物たちが己の秘密を守り、人目を忍ぶ恋にあくまで徹しようとするのは、彼らの恋が公に成立するため
の道徳的・社会的条件を全く欠いているからなのである。世間に知れば直ちに潰える態の恋愛に何らかの価値
があるとすれば、それはただ次の一点、意中の女性を烈しく恋慕う男性は、そうした恋愛の苦しい経験を通し
て己の人格を高めるということ以外にはない。アンドレアス・カペッラーヌス (Andreas Capellanus) の『恋愛
論』 (De amore) は恋愛の効用をこう述べている。

Effectus autem amoris hic est, quia verus amator nulla posset avaritia offuscari; amor horridum et incultum omni facit fornicitate pollere, infimos natu etiam morum novit nobilitate ditare, superbos quoque solet humilitate beare; obsequia cunctis amorosus multa consuevit decenter parare. O, quam mira res est amor, qui tantis facit hominem fulgere virtutibus, tantisque docet quoniamlibet bonis moribus abundare!

(恋愛の効能は、つまり、真の恋人たる者、いかなる貧欲さによっても心を汚されることがないことである。愛は荒々しく粗野なる者をあらゆる美において富ましめ、生まれ卑しい者に高貴な人格を豊かに与え、また高慢なる者に謙讓を恵む。恋する者は常にあらゆる人にたいし多くの奉仕を優雅に行う。おお、多くの美德で人を輝かせ、あらゆる人に多くの善良さを溢れるほどに字ばせる愛とは、なんと素晴らしいものか！)(1)

とはいえ、恋愛には、ただでさえさまざまな笑うべき、好ましくならぬ現象を伴うことは、アンドレアース自身が同書第二部で縷々述べているところである。恋は盲目なりとする認識は、古今東西に共通する。とすれば、結婚とは無縁な場における人間の愛の烈しい情念にこそ人間の真実を見、芸術的な美を見出そうとする種類の文学は、単に社会一般の通念や常識にたいする挑戦であるばかりでなく、自らの存立を脅かすほどの危険な綱渡りを行っていることになる。

作者は無論このことを十分に承知している。そのため、作品を成立させるあらゆる手段が講じられ、あらゆる口実が用意される。愛という言葉の多義性の背後に身を隠し、あるいは最後に一転して全体を教訓譚と化するなどもそれである。これは『トロイルスとクリセイデ』の場合も同様である。例えば、物語の悲劇的な人物たちへの慈悲を讀者に繰り返し求める作者の言葉、あるいは、自らをロリウスなる原作者の単なる忠実な追従者・翻訳

者とする主張なども、そうした自己韜晦の手立てと看做しうる。

以上の点を確認した上で、小論は、以下において、秘密の保持を絶対の条件とする愛が、『トロイルスとクリセイデ』の登場人物たちをいかなる窮境に導いたか、あるいは、作者がこの条件にたいしていかなる扱いを示しているかを、テキストの読みとも関連させながら、見ていくことにしたい。その場合、やや煩雑にはなるうが、『トロイルスとクリセイデ』の粉本たるボッカッチョ (Giovanni Boccaccio) の『フィロストラト』 (*Il Filostrato*) への言及も、時によっては避け難い。

2

恋に落ちた人物は当初自らの胸の思いを意中の女性に伝える手段を持たない。トロイルスの心中をそれと見抜き、相手の女性クリセイデの名を聞き出したパンダルス (Pandarus) は、親友として自ら献身的な仲介者の役を買って出る。クリセイデの叔父でもある彼は、これら恋人両者の間を自由に往き来できる、いかにも理想的な仲介者である。事実彼の働きは目覚ましく、それはわれわれの予想をはるかに越える。しかし、およそ仲介者なるものには「いかがわしさ」が付き纏う。まして、(本人たちの自覚はどうであれ) 社会的な承認を得ることへの断念の上に築かれる恋愛の仲立ちであれば、その役割りに関する限りは、完全に闇の存在であることを強いられる。そういう彼が、彼自身は、実は失恋の連続だというのも、こうした人目を忍ぶ愛の媒介人として逆転した世界に生きる彼の、面目躍如たる部分なのである。

カペッラーヌの『恋愛論』はこうした恋愛の教本とも言うべきものであるが、そこには、恋人は「直ちに助けを求めて、仲介者を見出そうと必死に努める」(statum enim iuvamen habere laborat et internumtum invenire)

(2)とあって、仲介者の存在は認められてはいるものの、数カ所のごく短かな言及がある他は、その役割等についての直接的な説明は、当然のことながら、ない。

苦悩に力なく打ち沈むトロイルスを懸命に励まし、逡巡するクリセイデをあの手この手で説得し、両者の間に立って恋文の伝達を忠実に行うパンダルスの八面六臂の働きの前には、越え難い障害など何一つないかのように思える。だが、秘密の露見を最も恐れているのは、このパンダルスなのである。

この指摘は一見事実に戻すことのように思われるかも知れない。少なからず熱に浮かされて注意散漫になりがちな友人にたいして、あくまでも慎重に行動するように言うパンダルスの言葉は、いかにも豊富な経験に裏打ちされた、分別ある年長者の忠告という趣がある。だが、彼自身が置かれている立場の危うさは、いついかなる時も彼の念頭にあつて、忘れられてはいない。そして、その懸念が忠告となって表に現れるのが、いつも決まると彼の働きが見事成功をおさめた際であるのも、極めて象徴的である。クリセイデとの対面を、彼のめぐらす策略によって今やまがりなりにも果たしたトロイルスにたいして言う、彼の言葉を聞こう。

“ .. were it wist that, thorough myn engyn,

Hadde in my nece yput this fantasie

To doon thi lust and holly to ben thyn,

Whi, al the world upon it wolde crie,

And seyn that I the werste trecherie

Did in this cas, that evere was bigonne,

And she forlost, and thow right nought ywonne." (3.274-280)

(「……あなたの願ひ通りにし、あなたに総てを捧げるといふ、こうした浮ついた考えを、私が策略を講じて姪に吹き込んだことが世間に知れたならば、世の人はこそぞつて声を上げ、この一件では私が最凶の、前代未聞の裏切り者だと非難し、あれは全てを失ひ、あなたには全く何の得もなかったということになってしまふのです。）」(3)

失恋続きであるわが身の不運を嘆きながらも、秘密の露見を懸命の忠告で回避しつつ、あくまでも狂言回しの役に徹して、文字通りトロイルスを裸にしてクリセイデのベッドに押し込みましたパンダルスであったが、その彼を事実上任務の放棄に導く事件がやがて起きることになる。

その事件とは、言うまでもなく、クリセイデとアンテノール (Antenor) との交換であったのだが、この決定を知った際のトロイルスとクリセイデの悲嘆ぶりにわれわれは氣を取られてしまい、この事件が彼パンダルスの心中にどのような衝撃を与えたかについては、未だ十分な考慮が払われてこなかったように思う。

クリセイデがアンテノールとの交換で、ギリシャ陣にいる父カルカース (Calkas [Calchas]) に引き渡されることとトロイ側で決議されたことを知ったパンダルスは、トロイルスに次のように言う。(ただし、ここでの引用は、『フィロストラト』に拠らざるを得ない。この部分に相当する『トロイルスとクリセイデ』の第四卷三七九行以下の個所には、肝心な教行が省かれているからである。)

Pandaro, il qual non men forte piangea,

秘めたる愛のバラドックス

rispose:—Sì, così non fosse 'l vero!
omnè lasso, ch'io non mi credea
che questo tempo si dolce e sincero
mancasse così tosto, né potea
meo vedere ch'al tuo bene intero
potesse nuocer fuor che palesarsi:
or veggio i nostri avvisi tutti scarsi. (Fzl. 4.46.1-8)

(パンダロは「トロイオロ (Troilo)」同様にはげしく涙を流していたが、こう答えた。「ええ、これが本当でなければいいものを。ああ、考えても見なかった、これまであれ程に楽しく純粹であった時が、これ程素早く失われようとは。それにまた、あなたの完全な幸せを損ねるものが、事の露見以外にあらうなどと、私は思っても見なかったのだ。今にして私は知った、私たちの考えは総て浅智恵なのだ。」(4)

これはパンダルスならぬパンダロの言葉ではある。だが、ここに、腕に自信を持ち、専ら秘密の保持に最大の関心を払ってきた、チョーサー描くところのパンダルスの深い挫折感を読み取ることは、単に筋違いであろうか。パンダルスの以後の言動は、この部分の理解なくしては、把握し難く思われる。

パンダルスは、この後も、腹心の友であり続け、その誠意には全く疑いをはさむ余地はないように思える。しかし、トロイルスに駈け落ちを勧め、あるいは善後策を完全に恋人同士の話し合いに委ねる彼の行動は、この折彼の心中に生じた深い断念、戦線離脱の意志を、明白に物語っている。

しかし、チャーサーは、秘密性に自己の存在理由をかく見出していたバンドルスがまさしくそのこと故に挫折したことを知る手掛かりとなるこの引用後半の敷衍を、なぜ省いたのであろう。

詩人の心中を忖度することがもし許されるならば、ひとつには、運命についていうここでのパンダロの言葉を、さらに敷衍したかたちでバンドルスに述べさせ、それを次の場面で展開されるトロイルスのあの有名な運命論(4:958-1082)に主題的に関連づける意図があつたものと思われる。しかし、またひとつには、作中から理解の鍵を意図的に除去するという、チャーサー一流の自己韜晦の手法が、ここでも疑われる。

しかしながら、それはともかく、運命の開拓を今や自らの手に事実上委ねられたわれわれの恋人兩名は、これまで二人の間に立つて事態を完全に掌握し、自ら事態の完璧な統制者をもつて任じていたバンドルスの、あるいは彼に代わる仲介者の支援なくして、十分やうに行けるのであろうか。あるいは、少なくとも彼らの秘密は保たれるのであろうか。『フィロストラト』とは違い、休戦時に、ギリシャ側になお留まっているクリセイデにトロイルスの手紙を届ける使者バンドルスの姿は見られない。トロイルスは、一体、バンドルス以外の誰に、彼以外のいかなる信頼し得る使者に、彼の手紙を託したのであろう。

3

トロイルスのためにクリセイデの説得役を買って出たバンドルスは、兩名にとつて恋文の指南役であつたと同じに、その手紙を相手に自ら届けてくれる、まさに信頼するに足る使者であつたのだ。しかしそのことについて論を進める前に、われわれは、手紙が、あるいは書かれた文字一般が、中世の人々に意味したところのものを、少しばかり見ておかなければならない。(5)

識字率は当然に低かった。古代ローマの詩人オウィディウス (Ovidius) の『アルス・アマトリーア』(Ars amatoria) にも恋文指南の言及がある。しかし、古代ローマの人々が、それも特に女性たちが、どれほど字が読めたであろうと問うことは、ここでは不要である。(もつとも、オウィディウスの想定する読者層は、識字を当然とする極めて限定された階級の人々であったことを、それらの詩行は物語っているのであるが。) われわれとしては、そこに大きな矛盾を見出さぬ限り、作者の記す通りを、そのままに事実として受け取るしかない。大いに時代も下る十四世紀の作品ながら、場面がトロイ戦争の時期のトロイに設定された『トロイルスとクリセイデ』の人物たちについても、事情は同じである。また、アルス・ディクタミニス (ars dictaminis) の名で呼ばれた書簡文作成術が、中世の際立った文化事象であったこと、そしてそれがチャオサーの作品中の手紙文にも影響を及ぼしていることも、われわれは知っている。しかし、このことについても、今は敢えて問題にしない。

(6)

しかしながら、古代・中世の文字観について、今の場合、以下のような事柄を心得ておくことは有益である。未だ中世期には、書かれた文字に対する不信という、すでに遠く古代に発する感情が濃厚に残っていた。とにかく、証文よりも証人の肉声に、より以上の真实性を認めていた時代である。文字は人を騙し得るものという考えは未だ根強く、外交手段としての書信もそれを持参する使節による代読、あるいは十分な口頭説明を前提とするものであった。書かれた内容の真实性は、使者の存在なくしては認め難いものであったのだ。路上の治安の問題もあり、すり替えの危険も十分にあった。中世は想像以上に文書偽造の横行した時代であったという。重要な用件はむしろ使者の記憶に託すことが安全と考えられていたのである。

つまり、前節では仲介者なるものの「いかがわしさ」に触れるところがあったが、実はその仲介者もたらす

手紙そのものもまた、本来的に疑惑を呼ぶ類のものであったことを、ここで確認しておきたい。このことは、手紙の書き手の側に、そしてそれを届ける者の側に、手紙をそうした疑いや危険から守る十全の配慮が不可欠であったことを直ちに意味する。

人間の極めて深い所に発する全く私的な恋愛感情を相手に伝えるには、たとえパンダダルの機知縦横な弁舌の才をもつても十分でなく、秘密保持を考えれば避けて然るべき手紙が当人たちによって書かれざるを得なくなる。恋文を書くよう最初勧めるのも、パンダダルスである。良き仲介者こそ恋文の効能を知ると言うべきであろうか。手紙を運ぶ使者が単なる運び屋に留まらぬことは先にも触れた通りで、そこにもまた彼の活躍の場が開かれていた。パンダダルの恋文の書き方についての微に入り細をうがう忠告の現実的な有効性や、彼の使者としての適格性には疑問の余地はない。問題は、優れた恋人は、これまで見てきたような意味で、遺漏のない恋文の書き手であることを要請されるが、はたしてトロイルスとクリセイデは、そうした良き手紙の書き手であったらうかということであるのだ。

トロイルスは第二巻で、智恵の女神ミネルワに助力を求めつつ、パンダダルの忠告に従い、クリセイデに宛てた最初の手紙を書く。その忠告はあたかも手紙の書き方を全く知らない者に対するそれである。トロイルス自身も己の無知を恥じて、大いなる逡巡ぶりを示す。しかし、ここでは作者が要約でしか示していないその手紙の内容よりも、手紙をとまかくも書き上げた後のトロイルスの行動に注目しよう。彼は手紙を再度読み返し、折り畳む。

And with his salte teiris gan he bathe

秘めたる愛のパラドックス

The ruby in his signet, and it sette
Upon the wax deliveriche and rath.

Therwith a thousand tymes er he lette

He kiste thro the lettre that he shette,

And seyde, "Lettre, a blisful destine

The shapyn is: my lady shal the see!" (2.1.086-92)

(そして彼は、印章を彫り込んだルビーを塩辛い涙に浸し、手早く、素早く、封蠟に押し付けた。それから今や封をしたその手紙をいっかな放そうとはせず、千回もキスをし、こう言い続けていた。「手紙よ、幸運がお前を待ち受けている。お前はかの人に会えるのだ!」と。)

封蠟とは、言うまでもなく、手紙が途中開封されることのないように封じ目に押し付けた蜜蠟である。しかし、文に封印をすることは、確か規則違反ではなかったのか。カベッラーヌスの『恋愛論』には、シャンパーニュ伯爵夫人の裁定第二十一がこう記されている。

*mutas sibi invicem missas epistolas proprio non debent insignire sigillo, nisi forte habuerint secreta sigilla
quae nulli nisi sibi et suis secretariis manifesta.*

(互に取り交わす手紙には、本人同士および腹心の友のみが知る秘密の印章でも持たぬかぎり、印章を用いて封印してはなりません。)(7)

『フィロストラト』のトロイオロも同様に封印を押す。しかし、彼の場合は、パンドロという腹心の友に全幅の信頼をおいての意識的な行動であったと考えられるが、この「手早く、素早く」(deliverliche and rathe)というチョーサーにおける表現は、トロイルスのここでの行動が、結果はともかく、無反省な反射的行動であったことを暗示しようとする、詩人の周到な措辞であったと思われる。そうと強く疑わせるのは、この副詞は、実は、手紙の心得がトロイオロに十分にあったことをいう『フィロストラト』の次の箇所からの、移し替えただけである。トロイオロはパンドロの忠告を聞いた後、自室に行き、

come saggio

alla sua donna carissima scrisse

una lettera presta. (Fil. 2.95.6-8)(イタリック筆者)

(むしろがに心得たもの、最愛の恋人に宛てた手紙を素早く書き上げた。)

トロイルスは、他の箇所でも、机に向かってから後、どう書いたものかと思案に耽る。パンドルスに手紙を書くように勧められ、「あなたは名文家」(thow kanst wel endite: 5.1292)と言われていることであつたが、これは今やパンドルスのあの「深い断念」後であることに、われわれは注意しなければならない。

Accorded ben to this conclusion,

And that anon, thise ilke lordes two;

秘めたる愛のパラドックス

And hastily sit Troilus adown,

And rolleth in his herte to and fro

How he may best descryven hire his wo. (5.1.310-14)

(そうすることに貴人二人の考えは纏まった、それも直ぐさま。それで、トロイルスは急いで座り、胸の悲しみをいかな名文で彼女に伝えんものかと、あれやこれやと思案に耽った。)

トロイルスは結論を下すのも早く、座るのも早かったが、しかし……というこの書きぶりは、今や読者の笑いを誘う。いや、一人ひそかに笑みをもらしていたのは、チョーサーその人であったかも知れない。だが、われわれには、更に、パンダルス以外の人物によってギリシャ陣のクリセイデに届けられたと思われるこの手紙 *Litera Troili* にも、トロイルスが「手早く、素早く」封印したのではなかったかと疑われるのだ。(この手紙に相当する『フィロストラト』の個所では、トロイオロも封印を行っている。だが、ここではパンダロが使者を勤めている。) いや、そのこと以上に、一般には模範的な書簡文と看做されているこの手紙には、何か思わぬ重大な過ちがひそんでいるのではないかと強い不安を覚える。

やはりそれは杞憂ではなかったのだ。百五行に及ぶこのトロイルス腐心の「名文」には、『フィロストラト』の相当部分には決して見当たらぬ名宛人クリセイデの名が、ただの一個所とはいえ、はっきりと書き込まれている。見過ごされてあるいは当然とも思えるこのことの意味合いは、シャンパーニュ伯爵夫人裁定第二十一の、先に引用した部分の前に書かれている言葉を見るといい。

si visitationis inter se amantes utantur epistolis,

propriorum nominum etiam scriptione abstineant.

(恋人同士が文通を行うばあいには、自分の名前すら記してはなりません。)(8)

ところが、トロイルスの手紙にはこうある。

Iwis, myne owene deere herte trewe,

I woot that when ye next upon me se,

So lost have I myn hele and ek myn hewe,

Criseyde shal nought konne knowen me. (5.1401-4)(イタリック筆者)

(確かに、私の親愛なまことの心よ、あなたがこの次に私をご覧になれば、すっかり私は健康も顔色も失っていて、クリセイデは私を誰とはきつとお分かりにならぬでしょう。)

同じこの手紙の末尾に記されている発信者の署名 *Le vostre T. は' Lierra Criseydis* (5.1590-1631) の *La vostre* 〇と同様、写字生の加筆とするのが最も妥当であろうから、それは別段問題でないとしても、わが名よりも秘すべき相手の名を恋文に書き入れたことを、トロイルスはどう申し開きできるのであろう。作者チャーサーの側の勇み足なのだ弁明できるであろうか。遺憾ながら、そうすることは彼にはできない。これも『フィロストラト』訳出の際に詩人が行った意識的な移し替えだと思われるからである。『フィロストラト』中の手紙に、人名が、それもクリセイダ (*Criseida*) の名が記された個所が、はなはだ興味深いことに、チャーサー同様ただ一

例見出される。確かに物語中において占める位置も違い、書き手も異なるものの、これを単なる暗合とは看做し難い。

A te amico discreto e possente,

il qual forte di me inganna Amore,

come non preso di me 'ndebitamente,

Criseida, salvato il suo onore,

manda salute, e poi umilmente

si raccomanda al tuo alto valore,

vaga di compiacerti, dove sia

I'onestà salva e la castità mia. (*Fil.* 2.121.1-9) (イタリック筆者)

(思慮深く力あるお方ながら、愛の神にわたし故にひどくお惑わされになり、わたし故に不当にも囚われの身になっておられるそなた様に、クリゼイダは、名誉を守りつつ、友として挨拶をお送りいたすと共に、誉れと操が汚されぬ限りはお気持ちに添わんことを願いつつ、そなた様の高きご人徳にわが身をお捧げ申し上げます。)

これはチョーサーが『トロイルスとクリセイデ』では五行(2.1221-95)に要約して示した、クリゼイダによる、トロイオロからの最初の手紙にたいする全五十六行の返事(*Fil.* 2.121-27)の、冒頭挨拶部分である。しか

し、ここには、トロイルスの場合の筆の滑りとは違い、書き手クリセイダの明白なる意図がうかがえる。つまり、彼女が以下に書き綴る本文は読み手のトロイオロを一喜一憂させるほどに微妙な言葉遣いで書かれてはいるが、少なくともこの部分は、たとえこの手紙が第三者の手に渡って読まれることがあっても彼女には何らやましいところはない、この手紙は恋文などではない、という彼女自身の明確な意志の表明と見なければならぬ。したがって、パンダロに託されるこの手紙に彼女が封印を行なうのも、二重の意味で当然な行爲となる。

真の仲介者・助言者を今や欠いたトロイルスのこのような余りの無防備さを、クリセイデはギリシヤ側でどのような思いで見ているのであろう。彼女にも恐らくは存分に思いのたけを述べて見たい気持ちがあったであろうが、パンダルスという確実な仲介者を失った今、彼女には真情を吐露する一切の手段が奪われていたことに、われわれは気付く。

4

クリセイデの手紙に書き手自身の名が記されることはあっても、相手トロイルスの名がそこに現われることは決してない。これは一見当然のことのように思われるが、秘密の愛に自ら身を投じた彼女の覚悟の程を示す指標とやはりこれは看做されなければならない。手紙を書く心得のなさを嘆く彼女自身の言葉とは裏腹に、「名作家」とは言えないまでも、恋する女として彼女は少なくとも配慮の行き届いた文章を書いていることをわれわれは知る。不幸なことに、情勢は情緒纏綿たる恋文を書き綴ることを彼女に禁じた。しかし、良き恋文の書き手は、当然そうであつて然るべきトロイルスではなく、クリセイデであつたという点に、このチョーサーの作品の一つの注目すべき点がある。

こうしたクリセイデの手紙を見ようとするならば、最も分量も多く、しかも要約ではなく、全文採録 (verbatim) の彼女の唯一の手紙、*Liera Criseydis* (5.1590-63) に赴かねばならない。

クリセイデはこの手紙で、トロイルスの冷静さを欠く自己本位な態度を難じ、二人の関係についてすでに噂が立っていることを報じている。われわれはこの非難が必ずしも根拠のないものではないことを今や知っている。ギリシャ側に去る彼女の見送りの場の彼の様子から推しても、彼の行動がすでに内外に噂を呼んでいた可能性を否定することは難しい。これを彼女の「嘘言」とする見方には到底与しえない。(9) その上、人の噂こそは恋する者が最も恐れるべきものであったのだ。なにしろ、

Finitur quoque amor, postquam evidenter fuerit

propalatus atque inter homines divulgatus

(恋は、公然となり、人々に知られては、終わりとなる) (10)

からである。彼女は言う。戻る意志は十分にある。だが、なぜ今そうすることができないか、そして、いつ、いかにしてその意志を実行する積もりなのかは、この手紙には書けない。それも

lest that this letre founden were, / ... for feere (5.1602-3);

for wikked speche (5.1610)

(この手紙が人に見られはしないか……それが不安で、

悪い噂が立つのを恐れて)

である、と。(トロイルスの度重なる手紙にたいして、彼女はこれまで返事をあまり出した様子はない。ここでも同様な理由が彼女の心の中では大きく働いていたのであろうと考えることは、必ずしも不当な推測ではないように思える。) クリセイデはそうして最後に、「長さではなく、手紙は心がすべて」(Th'entente is al, and nat the lettres space.: 5.1.630) という格言を引用して、すべてを察してくれるようにとぞう。この引用を、ある批評家は、「言葉の道徳的意味を善意の申し立てたまひつて覆つ隠そうとせむ」(to conceal the moral significance of statement by avowing [her] good intentions) 彼女の「衝撃的な一例」(A shocking example) と見づるのであるが、(11) 現在の視点に立つわれわれには、今やこれは、孤立した彼女の悲痛な絶望の叫び声に聞こえる。この手紙には一般の解釈では矛盾すると思われる個所がある。第三節の後半と第四節を引用しよう。

But beth nat wroth, and that I you biseche;

For that I tarie is al for wikked speche.

For I have herd wel moore than I wende,

Touchyng us two, how thynges han ystonde,

Which I shal with dissymelyng amende.

And beth nat wroth, I have ek understonde

How ye ne do but holden me in honde.

But now no force. I kan nat in yow gesse

But alle trouthe and alle gentillesse. (5.1609-17)

この一六一四—一五行の二行は、このままでは、根拠のない非難の言葉となってしまうおう。「あなたが私をただ騙しておいでなのだ」ということも、「今や私には分かりました」というのでは、前後首尾一貫しない。この部分の読みは主なエディションで見てもさまざまで、いまだ未確定の状態にあるように思える。試案ながら、

For I have herd wel moore than I wende,

Touchyng us two, how thynges han ystonde,

Which I shal with dissymelyng amende:

And, beth nat wroth, I have ek understonde,

How ye ne do but holden me in honde.

(まことに思い及ばぬこと、私たち二人について、二人の仲がなにかと取り沙汰されているのを耳にいたします。さあらぬ風をよそおい、ことのおさまるよう努めとう存じます。それにまた、どうかお怒りになりませぬよう、これも耳にする噂話、そなたはただ私を騙しておいでなのだとも。)

とする読みを提案してみました。How thynges han ystonde (1612) ~ How ye do but holden me in honde

(1615) を、I have herd (1611) の目的節として並置させ、beth nat wroth (1614) と I have ek understonde (1614) を共に挿入句とする考えである。(12)

また、一六〇二—三行で帰れぬ理由は言えないとしながら、一六一〇行では一転して、留まっているのは噂のせいであると明かすのはどうであろう。ここでは *tarie [tarry]* (1610) を、一義的には *tarry (to tell the reason)*、つまりは、「理由を」言いよどむ」の意に解釈したい。ただし、ここには、チャーサー一流の言葉の多義性の利用があることは、勿論である。

クリセイデのこの手紙は、殊に上記のような読みを採用するならば、第三者の悪意ある目を意識して、徹頭徹尾秘密保持を目した、その意味では全く破綻のないものであったことが知られる。しかしながら、これはトロイルスが期待する種類の手紙ではまったくなく、そもそもトロイルスに彼女がこの手紙に込めた意味が伝わったかどうかさえ、極めて疑わしい。(13)

いい意味でも悪い意味でもどこかナイーブで、情熱に逸るトロイルスの文体と文章態度は、内に情熱を秘めながらも、なお表面は冷静に事を処そうとするクリセイデのそれとはそれぞれが置かれた立場の違いも加わって両極端に別れ、最早ここにおいては互いに全く異質 (*al strange*: 5.1632) なものになってしまっていた。

5

われわれは、人目を忍ぶ恋にこそ純粋な愛があるという、このまさに逆説そのものとも言うべき宮廷愛の前提自体を疑うことは、無論自由である。チャーサーその人がそのような愛を信じていたとはには断定し難い。したがって、専ら秘密というところに視点を置いた小論は、『トロイルスとクリセイデ』の全体を覆うには、

余りにも限定された視野しか持っていなかったことは明かである。しかし、こうした単純単一な視点が示し得る有意な論点が未だ有り得ることを示すことは、まがりなりにもなし得たであろう。

優れた手紙の書き手であることが当然期待された「愛の殉教者」トロイルスの恋文が、意外なところで破綻を見せ、一方、「愛の叛逆者」、「不実者」のクリセイデのそれが痛烈なまでに完璧であったという、逆説的と呼ぶには余りにも悲劇的な事実の直視は、この物語の新たな読み直しを、全体的にも、部分的にも、われわれに迫っているように思える。

ここではまた、チョーサーの仕事を少しく窺うことも敢えてしたが、これはボッカッチョの『フィロストラト』に得たいくつかの知見に支えられてのことであった。こうした作業が大いに実りあるものかどうかは不確かながら、本源にまで遡って読みを深める努力は今後もお続けなければならないはずである。(14)

註

- (1) P. G. Wash (ed.), *Andreas Capellanus on Love*, Polymouth: Duckworth, 1982, p. 38. またこの『恋愛論』については英訳 (John Jay Parry, *The Art of Courtly Love* (1941), New York: Frederick Ungar, 1958.) およびこの英訳からの重訳による邦訳 (野島秀勝訳『宮廷風恋愛の技術』法政大学出版局、一九九〇年) をも参照。
- (2) Wash, p. 34.
- (3) チョーサーからの引用は、便宜を考慮し、すべて Larry D. Benson (ed.), *The Riverside Chaucer*, Third Edition, OUP, 1988 に拠った。引用文に付した散文訳は、『フィロストラト』の場合も同様、単に参考までのものである。
- (4) 『フィロストラト』からの引用は、すべて *Tutte le opere di Giovanni Boccaccio a cura di Vittore Branca*, Milano:

- Mondadori, II (1964) で扱った。なお、註(2)を参照。
- (15) 中世・中世の羅マン語 研究の文庫 観望のトロイヰス William V. Harris, *Ancient Literacy*, Harvard UP, 1989 年4月 M. T. Clanchy, *From Memory to Written Record, England 1066-1307*, Harvard UP, 1979 年非難と再考の巻の巻。
- (16) 中世のロマン・ロマンス・ロマンス・ロマンスのトロイヰス James J. Murphy, *Rhetoric in the Middle Ages: A History of Rhetorical Theory from Saint Augustine to the Renaissance*, University of California Press, 1974 年 著者のトマ・チャーケの論議のトロイヰス Norman Davis, "The 'Litera Troiti' and English Letters" (1963), Stephen A. Barney (ed.), *Chaucer's Troilus: Essays in Criticism*, London: Scolar Press, 1980, pp. 145-58; John McKinnel, "Letter as a type of the formal level in *Troilus and Criseyde*", Mary Salu (ed.), *Essays on Troilus and Criseyde*, Cambridge: D. S. Brewer, 1979, pp. 73-89 年参照。
- (17) Wash, p. 270.
- (18) Wash, pp. 268-70.
- (19) 例として Donald R. Howard, "Experience, Language, and Consciousness: 'Troilus and Criseyde,' II, 596-931" (1970), Barney, p. 177: "a lie about people's gossiping" を参照。
- (10) Wash, p. 232.
- (11) Davis Taylor, "The Terms of Love: A Study of Troilus's Style" (1976), Barney, p. 239.
- (12) I Have ek understonde (5.1614) を挿入句として用いたトロイヰス *OED*, 2nd ed., UNDERSTAND, 12 a. の項を参照。
- (13) トロイルスは 5.1614-17 の箇所も、前述通常の解釈通りに「誤謬」した可能性が考えられる。
- (14) 少なくとも、われわれは、すでに時代物の版本を基に依然比較がなされ、最新の訳が最悪であったりするところを、倒錯的な現状に、留意するべきである。